
フェイトと名付けられた電子脳

マグロ頭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

フェイトと名付けられた電子脳

【Nコード】

N2018D

【作者名】

マグロ頭

【あらすじ】

昨夜、犬が死にました。主人が大変可愛がっていた犬でした。一番知りたくなかったのは悲しみだと気付きました。 今作はお題小説企画【劇場『すぽと』】のお題より創作したものを加筆修正したものです。企画に興味が沸いた方はぜひサイトに訪れてみてください。

昨夜、主人が可愛がっていた飼い犬が死にました。夜が深くなつた、寒い寒い秋の一夜のことでした。

日々衰弱していった身体。弱々しいあえぎ声とフローリングをひつかく度に響く、カサカサという音。最後は主人の腕の中で死んでいきました。絶命。その瞬間、ひとつの命に終りが訪れたのです。私はその時、ふとあの時のことを思い出していました。最後に二人が遊んだ、あの時間のことを。

数日前、犬はなぜか昔のように元気になりました。手を貸さないと立ち上がることも困難だったのに、部屋の中を歩き来しているのです。試しに屋外に出してみると、無邪気に走り回り、体力の低下のせいか長らくくわえていなかった綱を主人の下へと運んできました。綱をぽとりと落とし、尻尾を振って見上げる瞳。口は大きく広がり笑っているようにも見えました。遊んで遊んで。全身でそう伝えてたんだと思います。

主人は、その眼に驚きを浮かべてから、何か悟ったような諦めた色を浮かべ犬の要求に答えました。いっぱい涙を溜めながら、笑顔で犬と遊んだのです。足下に落とされた綱を拾い上げ、掛け声と共に投げていました。私はそんな二人の側にそとつかえていました。

たった十数分間しかなかった過去へのタイムトリップ。そこには私が越えられない目には見えない確実な隔たりがありました。時を共有してきた者たちだけが持つ、穏やかな空気と安らぎ。私は迂濶にそこへ入ることが出来なかったのです。

数回往復した後、遊び疲れたのか、犬は主人の足元で寄り添い伏せました。息荒く遠くを見つめるその瞳には充実感がみなぎっていました。隣に腰を下ろす主人。犬の身体を撫でます。何度も何度も飽きもせず撫で続けます。その表情はとても幸せそうで。犬と主人

の姿は、まるで一枚の絵画のようでした。

永遠が手に入るのならば、あの時あの瞬間をそつと時間の檻の中に閉じ込めてしまいたい。青く晴れた空の下、広がる一面芝生の真ん中で寄り添っていた二人の背中を。今になってそう思うのです。

犬が俄かに死の淵に面し始めたのは一昨日の晩、九時ごろのことでした。穏やかに過ぎていく夜の静寂を破ったのは、犬の突然の引き付けでした。

急に荒くなる呼吸。痙攣する手足。主人は興奮しながら私に何かを命じました。上気した表情で、指を差し叫ぶのです。早く、早く、早く！ 早くしろ！

悲痛な叫びは、しかし私には命令として理解することは出来ませんでした。鬼気迫る主人の怒声に、私はただ右往左往するばかりでした。何かしたい。けれど何をすればいいのか分からない。情報を自ら生み出すことは私には無理だったのです。

そんな私をよそに、主人は死に際の犬に必死に抱きつくようになっ
ていました。落ち着け。落ち着け。大丈夫だから。ゆっくり呼吸
してみる。ゆっくりだ。楽になるから。……どんなに声をかけても、
もうほとんど届くいてはいないだろうに。

早朝三時。犬はとても頑張りました。辛抱強く生きようとし続け
ました。

力なく横になった犬と、傍らに寄り添う主人。じつと犬を見つめ
ていました。もういいよ。もう十分だよ。ありがとう。ありがとう。
疲れ幾分か年老いたような主人は、何時からかそんな言葉を掛ける
ようになっていました。私はただ遠巻きに、ふたりを見ていること
しか出来ませんでした。

そして、その時は来たのです。
犬が激しく痙攣し始めました。カサカサ、カサカサ。爪が床を搔
いていました。

その痙攣に、主人は目を見開き身体を懸命に摩りながら語りかけ
ていました。

「頑張れ。頑張れ。死ぬんじゃないぞ」

空っぽの笑顔で、そう励まし囁いていました。

私は思わずふたりに背を向けました。そしてきつく目を閉じました。暗闇の中に、不規則な荒いあえぎ声と爪の音、主人の囁きが飛んできます。ぐるぐる、ぐるぐる、暗闇の中で回転して、私に響いてくるのです。もう止めて。込み上げてくる、信号でも命令でもない辛いものが一杯になって私を呑み込もうとしていました。

それがしばらく続いて、唐突に背後で一度大きな鳴き声がありました。力強く、凜々しく、逞しく、犬が吠えたのです。

暗闇の中が静かになりました。

私は目を開けて、ゆっくり振り返りました。だらしなく舌を床に投げ出した犬に主人が抱きついていました。

ありがとうございます。

もう二度と自らを見つめることのないガラスのような瞳に向かって、主人は呟いていました。

何度も何度も繰り返し呟いていました。

今はただ、一度だけ元気になった犬のあの姿が、一度だけ吠えたあの最後の声が、主人が繰り返した“ありがとうございます”という涙の言葉が、私の中で渦を巻いて荒れ狂っています。

主人は犬を火葬しました。そしてあの海に、初めて犬と出会ったあの海に還してあげました。灰色の空の下、荒れ狂う白波に遺灰は消えていきました。

立ち上がり車へと戻っていく主人。私の横を無言で通り過ぎていきました。私はひとり海を眺めています。

身体の一部が抜けて、ぽっかり穴が空いてしまったような、満たされない、何かが足りていないような気分でした。

そして、その空白がとても愛おしいのです。

運命と名付けられた私の電子脳。信号が行き交う機械の身体。涙を流すことのない私に“こころ”はあるのでしょうか。何時しかこ

フェイトと名付けられた電子脳

の運命は変わってしまったのでしょうか。
早朝の海風はどこか冷たく。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2018d/>

フェイトと名付けられた電子脳

2009年3月24日09時36分発行